

高木仁三郎市民科学基金 助成研究/研修 完了報告書

提出日：2006年 6月 25日

1. 氏名・グループ名及び研究テーマ

氏名(グループ名)	奥田 夏樹
連絡先・所属など	名城大学総合研究所・客員研究員 neritidae@hotmail.com
調査研究・研修のテーマ	エコツーリズムが自然環境に及ぼす影響についての研究
研修先の機関・名称など <研修の該当者のみ>	

2. 調査研究・研修の経過

・2005年8月 第1回野外調査(8月22日～9月7日)を実施。
西表島内での、自然体験型観光産業による利用対象地域の把握と、現地踏破による人為的影響の確認、生態系への影響調査の適地選定を行なった。

・2005年11月 第2回野外調査(11月23日～12月7日)を実施。
船浦湾地域における野外調査。
その他

・2006年3月 第3回野外調査(2月27日～3月10日)を実施。
船浦湾地域における野外調査。
アマオブネガイ類の底質への付着状況調査
その他

3. 調査研究・研修の成果

本助成研究では、西表島におけるガイドツアー事業者による地域利用実態の把握、およびガイドツアープログラムの専門性の検証を、野外調査、ガイドツアーへの参加、および聞き取りによって実施した。またより広く、観光に関連する地域の現状把握を行なった。さらに、自然体験型ガイドツアー（含エコツアー）が地域生態系に与える影響について、より科学的な検出をおこなうことを試みた。

重点調査地域は、西表島北西部の船浦湾に開口する、マーレー川、ヒナイ川および西田川流域とした。当該地域は自然体験型ガイドツアーによる利用が現在島内で最も高い地域である。

ヒナイ川流域は、西表島観光では、最も人気がある自然景観の一つであるピナイサーラの滝を擁し、以前から観光資源としての活用に向けた注目度は高い。代表的な自然景観としては、他に、仲間川のサキシマスオウノキ大木、浦内川のマリユドゥの滝およびカンピレーの滝を挙げることができる。仲間川および浦内川地区では1978年、またヒナイ川地区では2003年に、国有林内に自然休養林が設定されており、これら3地域は西表島において、観光産業によって比較的長期間、大規模に利用されてきた実績がある場所と見なすことができる。だが、これら3か所の利用形態、および歴史には大きな差違が見られた。

これら3地域のなかでも、浦内川地区および仲間川地区は、比較的古くから観光客の大規模な入域を可能にするための整備がなされ、また比較的長期にわたる大規模な利用実績も存在する。即ち浦内川は沖縄県最長（長さ19.4 km、流域面積69.5km²）、仲間川はそれに次ぐ最大規模（長さ12.3 km、流域面積32.3km²）の河川であり、いずれの地域においても動力船使用により大量の観光客を高い回転率で処理できることから、大型バスによる周遊コースに取り入れられている。

一方、ヒナイ川はこれら2河川よりも遙かに小規模な河川で（長さ約3.2 km）、動力船の運航もかつて一時的には存在したものの、他の2地区と比較して極めて小規模なものであった。従ってガイドツアーブーム以前は、浦内川および仲間川地区と比較すると入域者数は圧倒的に少なかったと推測される。にもかかわらずピナイサーラの滝が名高い景観であった理由は、落差55mの大規模な滝であり、船浦湾海中道路上から遠望できることが深く関係していると考えられる。

ガイドツアーブーム以前、あるいは初期にあたる1990年代初期の時点では、自然体験型ツアーのガイド業を営んでいる個人事業主・団体は、西表島全島でも10未満程度で、しかもガイド業だけで生計を立てられる例は皆無に近かったのではないかと、という証言が複数の当時を知る人々から得られている。同様に、カヌーレンタル業についても当時は黎明期で、その大部分は民宿などが副業的に行なう程度に限定されていたとのことである。即ち、この当時ピナイサーラの滝を間近に見ることを目指す入域者は、徒歩、あるいはカヌーをレンタルした上で、ガイド（道案内）なしで向かうのが通例であったことも判明した。

さらに現地調査からは、こうした歴史を持つ当該流域で、自然環境保全上、速やかな対応が求められる問題（水域への飛び込み、樹木の傷害、カヌーによる河岸浸食、無許可の施設整備による影響）の検出にも成功した。またこれらの問題を認識する上では、生物学的視点からの調査に止まらず、インタビューなども含めた学際的手法が極めて有効であることが明らかとなった。

アマオブネガイ類を対象とした、より生物学的に観光による被害実態を把握する試みは、最も直接的な方法である、徒渉による貝殻の踏み割りについては、底質が、徒渉の影響を把握しやすいと考えられる砂礫である場所を、徒渉頻度が高い場所の中から抽出できず、現地における精度の高い死亡の確認調査は断念した。代わって、砂礫底におけるアマオブネガイ類の底質への付着状況を調査し、砂礫底等の底質の粒度が細かい地域での、高頻度の徒渉が、貴重種を多く含むアマオブネガイ類をはじめとするベントスの生残に、影響を与える可能性があることを示す結果を得ることができた。

本研究から得られた知見から、西表島はもちろん、これからの日本において、自然と人間との関係のありかたはどのようなべきか。そのなかで自然体験型ガイドツアー（エコツーリズム）はどのような役割を果たしうるかについて議論した。

4. 対外的な発表実績

- ・2005年6月 日本生態学会“保全生態学研究”誌(10巻1号、pp. 99~100)に、「西表島を例とした自然体験型エコツーリズムをとりまく現状と問題点」を發表。
- ・2005年6月 インターネット新聞「JANJAN」に、記事「自然にも人間にも優しくない自然体験ツアー ~西表島と沖縄を例に~」を投稿(<http://www.janjan.jp/area/0506/0506198555/1.php>)。
- ・2005年9月 林野庁西表森林環境保全ふれあいセンターより、ヒナイ川流域国有林の保全利用協定締結サポート事業の一環として、研究を受託(NPO法人おきなわ環境クラブ・客員研究員として)。
- ・2006年2月 西表島上原の中野わいわいホールで行なわれた、林野庁西表森林環境保全ふれあいセンター主催、「ヒナイ川の未来を考えるシンポジウム」で講演。演題「自然体験型ツアーと自然環境の共存可能性を考える - 船浦湾地域の現状が示すもの - 」。
- ・2006年3月 日本生態学会第53回大会において、自由集会「市民としての生物学者と自然観 - 自然環境の保全・再生で求められる自然観とは - 」を主催。
- ・2006年4月 インターネット新聞「JANJAN」に、記事「沖縄：泡瀬干潟とエコツーリズム」を投稿(<http://www.janjan.jp/area/0604/0604122267/1.php>)。本投稿は、「JANJAN」編集委員選賞4月分(<http://www.janjan.jp/editor/0605/0605080049/1.php>)に採用された。

5. 今後の展望

・私は大学院での課題研究以来、現在まで10年以上に渡り、沖縄県の西表島を中心に研究活動を行ってきました。その間に西表島の地域社会、自然環境は大きく変化しましたが、それらを実見する中で、自然と人間との関係の将来像や地域社会について考えるようになりました。そして専門家として自然環境保全運動にも関わる中で、研究だけでは地域の伝統文化や自然は残せない、また代替となる地域の総合的な未来像を提案できなければ広い理解は得られにくい、ということを感じました。

そこで今後は、生態学の専門知識やフィールドでの経験を活かしつつ、社会科学、経済、政治などより多様な視点も取り入れながら、地域の文化や自然を守り育てる仕事、政策決定に関与できる活動に携わりたいと希望しています。

その一環として、自然体験型観光の問題についても研究・活動(研究活動ではなく)を開始したわけですが、貴基金にも助成頂くことができ、新たな取り組みを始める上で物心両面で大変励みになりました。恥ずかしながら現在は定職がありませんので、これからは普通に食べていながら同様の活動を行なえるよう、持続可能な活動を追求したく思います。

高木基金へのご意見

たいした実績もない身に対し、助成頂いたことに、改めてお礼申し上げます。また助成開始後も、事務局の菅波様には様々な局面でたびたびご助言頂くことができ、大変助かりました。

先日お邪魔した意見交換会でも感じましたが、持続可能性がキーワードでもある現代社会において、市民科学、市民運動でも今最も求められていることは、持続可能な運動であると感じています。よい意味で職業としての市民運動が成立して、政権交代によって行政に入ったり、下野したりといったことが普通にできる社会形成が必要だと近頃強く感じます。